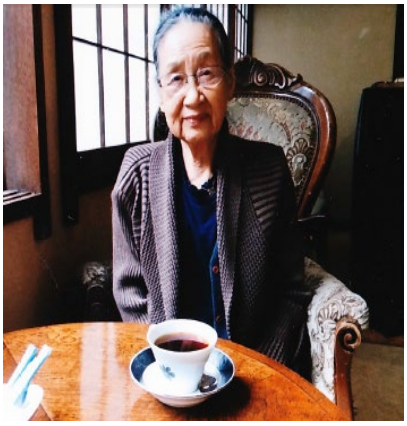
2018年1月号
No. 180

平成30年1月18日
関東中央病院　けやき会

けやき会通信

皆様おめでとうございます

石綿　正江



明るくなごやかな新年を迎えられましたでしょうか？

私も無事に大晦日の境を越すことが出来ました。これからは、人間のさまざまな苦労を卒業し、廻りの方に感謝しつつ大切な一日一日を心置きなく過ごしたいと思います。超高齢社会、多死社会を迎えた今、その中の一員の私は、サルコペニア、フレイル、認知症の坂道を下りつつあります。

昨年の九月には、要支援１の介護認定を受け、予防のリハビリテーション教室に通い始めました。

何も出来なくなり灰色の人生が待つだけ、夢も希望も失いましたが、同じ立場の仲間のいたわりと思いやりと若い職員達の優しさに支えられ次の人生の道を歩み始めました。そこは私と同年の友人に誘われた『ゆずりば』と云う集まりです。『ゆずりは』とは老いた葉が次の若葉にあとをゆずり散っていくとの意味と彼女が教えてくれました。彼女は不安な老後やパソコンの良き相談相手でした。その彼女が二か月前、孤独死を迎えました。うつろな心で見送ったあと、自然の風のそよぎゆれる木々に、窓にさしこむ日の光がキラキラ美しく、こんなに輝いた美しさを見た事がありませんでした。こうして今生きている事だけですばらしい。生きる事の有難さ尊さを身体中に感じ、手を合わせました。姿は見えなくとも心の中の彼女と会話して生きようと思います。

話は変わり、先日のニュースを見てハッとしました。地球の汚染が進み、海水の温暖化、生態系の変化が二百年前から進んでいる事を知りました。友人は今になってはどうしようもない、孫の未来が案じられると云います、とはいえ諦めてしまっては希望につながらない、地球単位では一粒の点の私でも気付いた自然の大切さ、すばらしさを是非、皆に知ってもらいたいと自分の体験をまとめ、お別れの意味も含めて心の通じ合う方々に五十冊を九か月間掛って手作りして届けました。　やっとこれで肩の荷がおり、清々しい新年を迎えられました。

十一月のけやき会の帰り道で仲間二人の会話を聞きました。もう八十才を過ぎたからいつ死んでも良い、注射や薬も飲みたくない、でも病院で先生に注射しますかと云われると「はい」と云ってしまう、生きていたいのかどっちなのか自分でも解からなくなったと、その言葉の陰に生きたいと願い死は当たり前と覚悟している強さと凄さを感じました。死を恐れる次の心境の世界のある事（強さと凄さと覚悟）を知りました。

先日、矢野様より今まで欅会の会員と幾多の別れがあったと伺いました。私どもは自分の事だけに終始し、それに気付きませんでした。

逝った方の痛みを受け止め欅会が身体と心の救いの場になります様、先生の御尽力とお互いのおもいやりでここに来ただけで勇気と知恵と安らぎを戴けます様、心から願います。

昨年に増す立派な欅会になります様、祈念し御挨拶・お願いに替えさせて頂きます。